

女子学生の中学家庭科の学習定着度の考察

Consideration of the degree of learning settlement of the girl student's junior high school homemaking course

森 田 清 美

Kiyomi MORITA

キーワード：定着度，家庭科教育法，生活人，生活基礎力

I. はじめに

総合生活デザイン学科のカリキュラムポリシー¹⁾は、「・・・学生の興味・関心に対応できるように自主的な学修や体験的学修によって生活を快適にデザインできる、『生活人』を育成する・・・」である。本学科の専門科目の多くは、小学・中学・高校で「家庭科」をベースとした科目である。本学科の学生は、小学・中学・高校で「家庭科」を学び、さらに『生活人』をめざし学修をしている。しかしながら、本学科の入学生の出身高校の学科は、森田²⁾の報告にあるように多様であり、高校での学びには差がある。小学・中学・高校で「家庭科」の学びを基に大学での学修を設定することが難しく、小学・中学・高校で「家庭科」の基礎・基本を振り返り授業をしなくては、授業が成り立たない。また、本学科では中学校教諭二種免許（家庭）が取得できる。教職課程の学生に、教育実習の事前指導で、中学校での指導する学習内容の理解が不十分で、中学校での指導する学習内容の理解を図る指導が必要である実態がある。

生活基礎力をつけることは、小学・中学・高校で「家庭科」の大きな目標であると同時に本学科においても大きな位置を持つものである。そこで、小学・中学での義務教育での「家庭』『技術・家庭』の定着度を調べ、今後の大学での授業の改善での手立てとすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象・時期

調査対象は、2016年10月に本学総合生活デザイン学科（生活創造コース）2年次生69名（全員女子）を対象に、無記名自記式アンケート調査を行い、調査の趣旨を説明して調査の同意が得られた63名の回答を得た。（有効回収率91.3%）

2. 調査内容

調査内容は、中学『技術・家庭』の学習内容を4つの領域（食・衣・住・消費）のそれぞれ8項目について、学生に「はい」「いいえ」の選択で回答を求め、定着度を調査した。また、中学『技術・家庭』の学習で一番記憶に残っている領域を調査した。質問項目は、日本家庭科教育学会の「家庭科で育つ子どもたちの力—家庭生活についての全国調査から—」の「第2章子どもたちは家庭生活で何をしているか」³⁾を参考にした。

※調査は、小学校家庭科学習指導要領のA・B・C・Dの4領域に対応するため、中学校家庭科学習指導要領の「保育」の領域の質問は除いた。

Ⅲ. 結果

1. 食の領域の定着度

図1に食の領域の定着度を示した。

「食事の後片づけができる」95%、「五大栄養素を知っている」94%、「食材を買う時、賞味・消費期限を気にする」87%、「リンゴの皮むきが包丁で上手にむける」79%と定着度が高い。「ファーストフードをほとんど利用しない」の項目に『いいえ』65%、「朝食をほぼ毎日摂っている」の項目に『いいえ』54%、「調理器具の安全で衛生的な取り扱いができる」の項目に『いいえ』49%と定着度が低い。

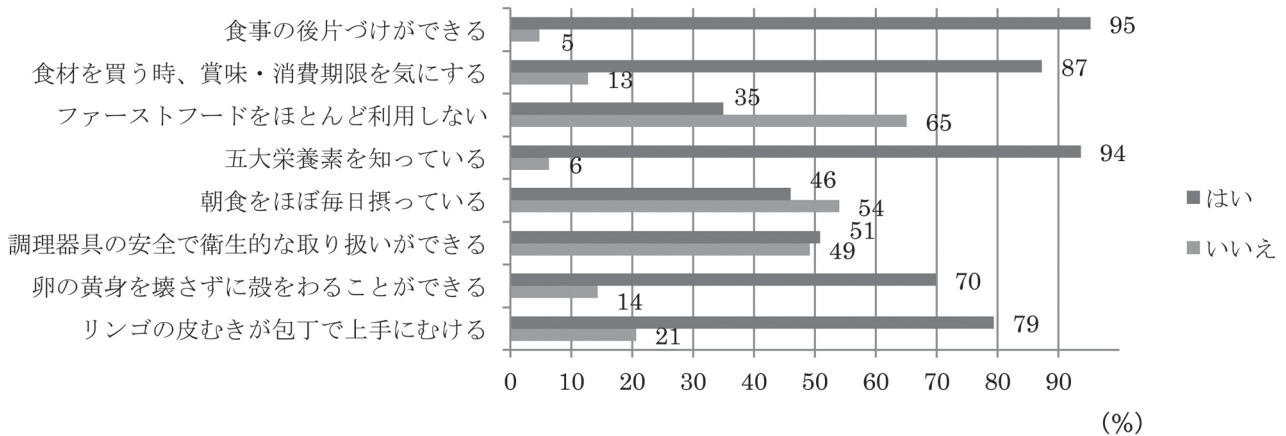


図1 食の領域の定着度

2. 衣の領域の定着度

図2に衣の領域の定着度を示した。

「セーターの手洗いに適した洗剤を選ぶことができる」68%、「ボタンつけができる」と「ファッション性より季節に合った服装を心がけている」がともに62%、「TPOを考えた服装ができている」57%と定着度が高い。「スカートやズボンのほころびを直せる」の項目に『いいえ』70%、「取扱絵表示を確かめて衣類を買っている」の項目に『いいえ』67%、「ミシンが使える」の項目に『いいえ』57%と定着度が低い。

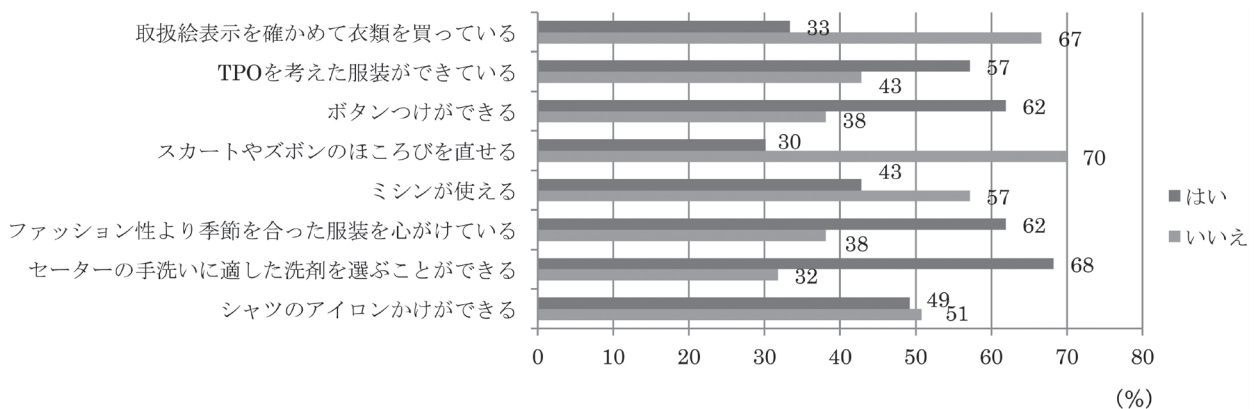


図2 衣の領域の定着度

3. 住の領域の定着度

図3に住の領域の定着度を示した。

「ゴミの分別をしている」65%、「身の回りの整理整頓ができる」52%と定着度が高い。「電気製品の故障時の対処法を知っている」の項目に『いいえ』92%、「地震などに備えて避難路をチェックできている」の項目に『いいえ』86%、「騒音を出さない工夫をしている」の項目に『いいえ』84%、「部屋の換気に気を使っている」の項目に『いいえ』65%と定着度が低い。

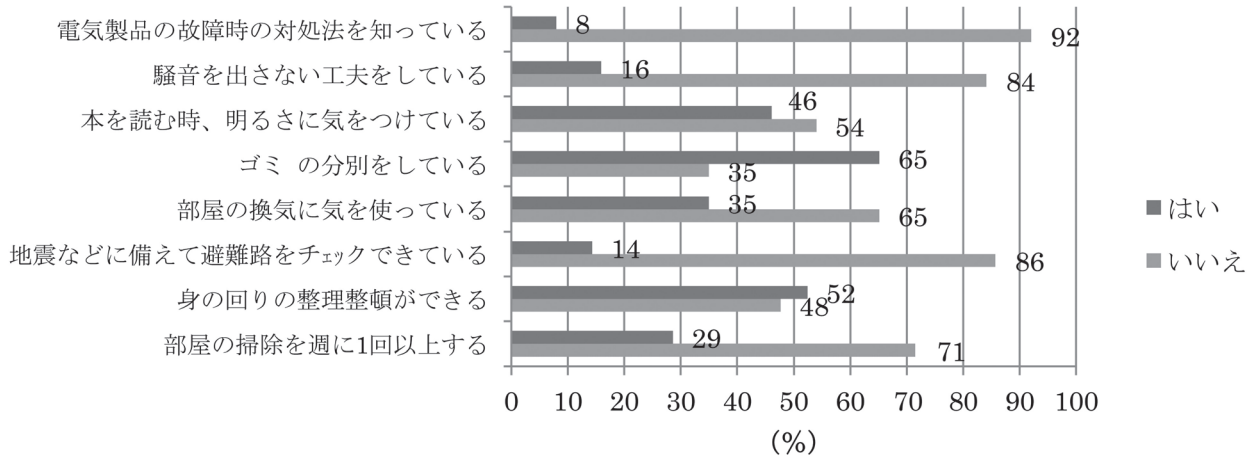


図3 住の領域の定着度

4. 消費の領域の定着度

図4に消費の領域の定着度を示した。

「物を購入する際、比較をして買う」94%、「クレジット・カードの仕組みを理解している」62%と定着度が高い。「家計簿をつけている」の項目に『いいえ』92%、「悪質商法に対処することができる」の項目に『いいえ』90%、「支払いはすべて現金でする」の項目に『いいえ』86%、「契約とはどんなことか説明できる」の項目に『いいえ』の項目に73%、「クリーニング・オフ制度を知っている」の項目に『いいえ』52%と定着度が低い。

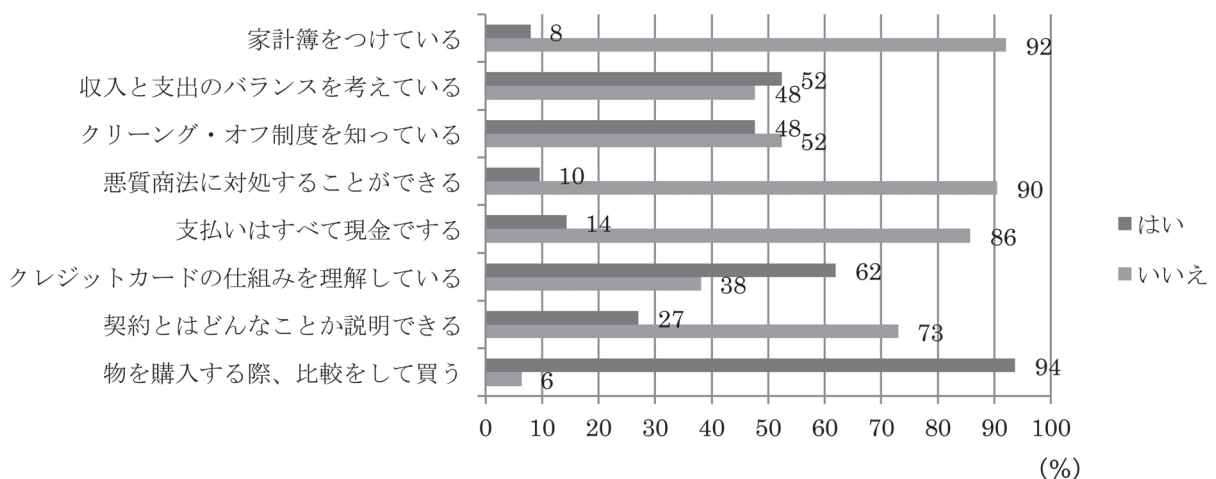


図4 消費の領域の定着度

5. 中学『技術・家庭』で一番記憶している領域

図5に中学『技術・家庭』で一番記憶している領域を示した。

食の領域54%が一番多く、続いて衣の領域33%と高い。消費の領域6%、保育の領域3%、住の領域が2%と低い。

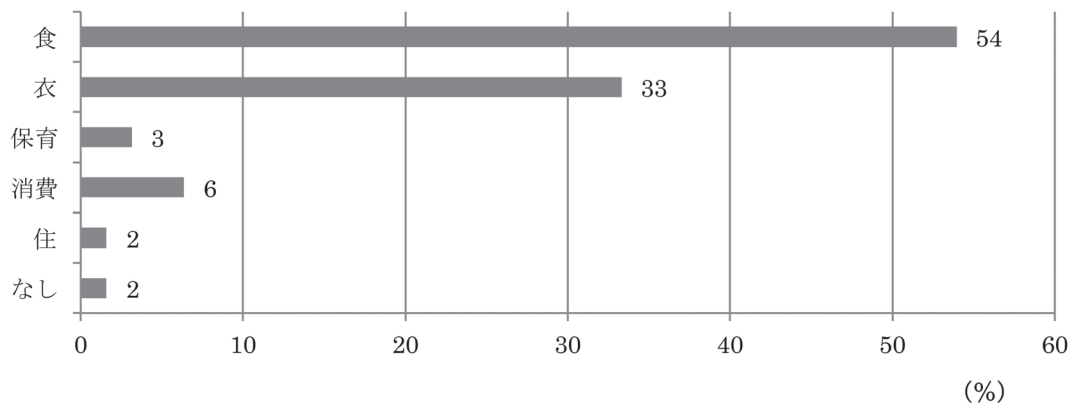


図5 中学『技術・家庭』で一番記憶している領域

IV. 考察

家庭科は、実践的・体験的な学習を行う教科であるが、中学の『技術・家庭』の授業時間数は、削減されている。調査対象の学生は、2008年に改訂された中学校学習指導要領⁴⁾の教育課程に基づき、『技術・家庭』は、中学第1学年・2学年ともに70時間*、第3学年35時間*を履修した。この時間数は、『技術・家庭』は、技術分野と家庭分野に分かれているため、1998年に改訂された中学校学習指導要領よりもさらに削減されている。

まず、食の領域の定着度を見ると、「食事の後片づけができる」「食材を買う時、賞味・消費期限を気にする」「リンゴの皮むきが包丁で上手にむける」などの実際の生活で日々行っている項目は定着度が高い。しかし知識の定着度は「五大栄養素を知っている」94%と高いが、「ファーストフードをほとんど利用しない」や「朝食をほぼ毎日摂っている」の項目は低く、実際の食生活の行動に課題を持っている。

衣の領域の定着度を見ると、「セータの手洗いに適した洗剤を選ぶことができる」「ボタンつけができる」「ファッション性より季節に合った服装を心がけている」「TPOを考えた服装ができてい」などの実際の生活で日々行っている項目は定着度が高い。しかし「スカートやズボンのほころびを直せる」「取扱絵表示を確かめて衣類を買っている」「ミシンが使える」の項目の被服整理や縫製する分野の学びの定着度が低い。ミシンの取り扱いの定着度の低さは、大学の「ファッション造形実習」の授業に顕著である。実際、衣生活において衣服は既製品であることが多く、そのため「ミシンが使える」ことは、必要度は低い。しかし、「ミシンが使える」ことで生活を工夫するという視点ができ、例えば染めた布でミシンを使い、小物（袋や花瓶敷）などができるなどと広がる。

住の領域の定着度を見ると、「ゴミの分別をしている」が最も定着度が高い。しかしながら、「電気製品の故障時の対処法を知っている」「地震などに備えて避難路をチェックできている」などは20%以下で定着度が低く、住の領域においては災害時のあり方の学びを深める必要である。

消費の領域の定着度を見ると、「物を購入する際、比較をして買う」「クレジットカードの仕組みを理解している」は定着度が高い。しかし、お金の管理することに関する「家計簿（現金出納帳）をつけている」「契約とはどんなことか説明できる」「クリーニング・オフ制度を知っている」は定着

度が低い。消費に対して最も意欲が高い年代である学生にとり、買うことが消費であり、お金の管理することについての意識は低いことがわかる。

中学『技術・家庭』で一番記憶している領域は、食の領域が一番多く、続いて衣の領域である。大森ら⁵⁾の食生活領域に関する知識の定着度の調査と同様、「五大栄養素を知っている」94%と知識の定着度が高いが、「ファーストフードをほとんど利用しない」や「朝食をほぼ毎日摂っている」の実際の生活に反映されていない。食事の重要性を認識し、食事の喜びや楽しさを理解するとは言い難い。田中ら⁶⁾の家庭科学習の定着度の調査では、食の領域ではある程度の定着度がみられたが、衣・住の領域では定着度が低いことが明らかになった。本研究において同じ傾向が確認された。

本学科の専門科目の多くは、学校教育の教科のなかでも家庭科の学習が基礎となる学びである。そのため、大学の授業で、定着度を再確認する機会があり、生活基礎力がある生活人の育成することは達成されつつある。しかしながら、教職課程の学生の中学校での指導する学習内容の理解が“教える”基準に満たしているか否かは、本調査では把握できなかった。

また、中学『技術・家庭』で一番記憶している領域の中で最も低い領域は住の領域である。災害時の住のあり方の学びを深める必要を考え、大学1年次に学科取組として「防災教室」を設定した。このように小・中学の学習では定着しにくい領域は、大学や生涯に渡り機会を捉えていくことが大切である。

大学だからこそ、学びを受動的基点から能動的基点として、生活基礎力を自立の基盤つくりと捉えて、授業改善を模索したい。

* 授業時間数1時間は50分

V. おわりに

生活基礎力をつけることは、小学・中学・高校で「家庭科」の大きな目標である。小学・中学での義務教育での「家庭」『技術・家庭』の定着度を調査から、食の領域においては、知識の定着度はあるものの実際の食生活の行動に課題を持っている。衣の領域においては、被服整理や縫製する分野の学びの定着度が低い。住の領域においては、災害時の住のあり方の学びを深める必要である。消費の領域においては、買うことが消費であり、お金の管理することについての意識は低い。学生の実態に踏まえて取り組むために、「生きる力」を身につけた『生活人』の到達目標を具体的に設定し、授業改善に取り組むたい。

終わりにあたり、アンケートにご協力くださいました皆様に深謝申し上げます。

VI. 文献

- 1) 2016 学生便覧, 比治山大学短期大学部, pp. 30
- 2) 森田清美: 中学校教諭二種(家庭)の学修の一考察—教職課程「教科に関する科目」の指導の視点から, 比治山大学短期学部研究紀要第50号, pp. 1 - 9 (2015)
- 3) 日本家庭科教育学会「家庭科で育つ子どもたちの力—家庭生活についての全国調査から—」明治図書(2005)
- 4) 文部科学省: 中学校学習指導要領解説「家庭科編」, pp. 38 - 40, 教育図書, 東京(2010)
- 5) 大森桂, 高木直: 家庭科食生活に関する知識の定着度, 日本家庭科教育学会要旨集, pp. 56 (2013)
- 6) 田中志保, 内田恵美子: 家庭科学習の定着度, 奈良教育大学実践総合センター研究紀要第19号, pp. 53 - 59 (2010)